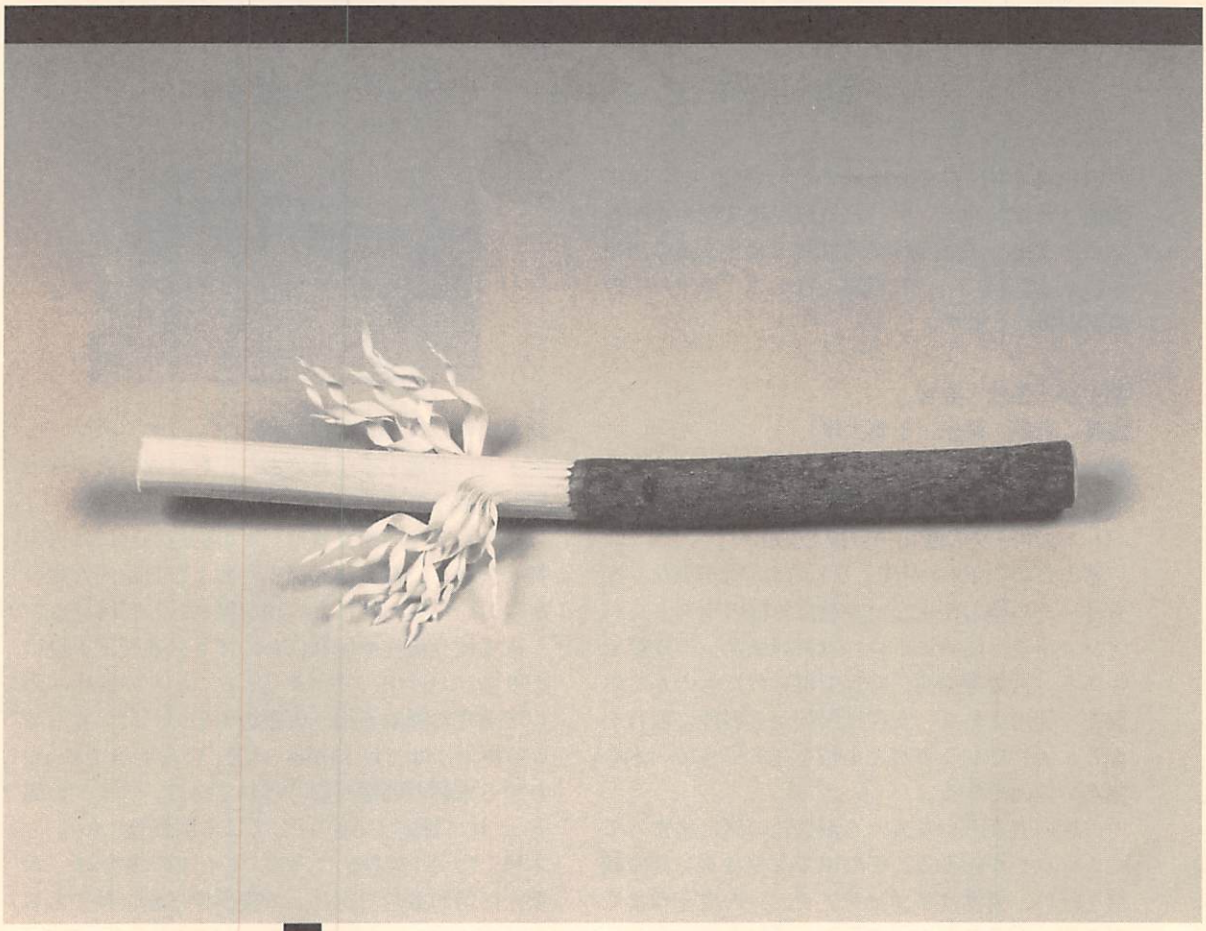
ISSN 0917−4729

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples



H11.9.2
ミズキ製魚叩き棒（北海道アイヌ）
野本正博作　長さ　43.4cm

北方民族博物館だより
−44号−


第16回北方民族文化シンポジウム　2
共催事業　民博ゼミナール　5
文化の日特別事業　「北に生きる−民族の映像文化誌−」　6
講座「鉤銛にみる文化交流」
お知らせ・表紙・記事　7
ニュース　8

# 「北方諸民族文化のなかのアイヌ文化 ー文化交流の諸相をめぐってー」

平成13年10月20日（土）、21日（日）　於オホーツク・文化交流センター

第16回北方民族文化シンポジウムは過去2年間に開催された共通テーマ「北方諸民族文化のなかのアイヌ文化」を総括する意味で「文化交流の諸相をめぐって」をテーマに開催しました。以下にその概要を報告します。

**第１部「伝統と変容」**
**座長：荻原　眞子（千葉大学）**

**■アンナ・フョードロブナ・マリコヴィッチ**
**（ロシア・カムチャツカ州英語教師）**
**「コリヤークの儀礼ー伝統と変化ー」**

氷のためにボートが使えなくなり、雪が少なく氷も薄いため橇も使えない晩秋は狩猟のラストシーズンであり、同時にホロロ（狩猟儀礼）の季節でもある。採集や漁撈、狩猟で得られたものがこの儀礼で利用される。女性は早朝から料理に取りかかり、男性はシラカバと小枝を運んできて、木を刻んで仮面を作る。

一族の者たちや友人たちが儀礼の席に集まって「ホロロ」が始まる。この中で女性はダンスの競演を行い、男性はアゴヒゲアザラシの皮をうまく引き裂くなどの力比べで強さ、勇気を競い合う。

このような儀礼は、現在多くの要素が失われてきているが、その要因としては、ロシア正教会、帝政ロシア政府による禁止令、小さな集落から大集落への集住化（再編）にともなう喪失、ロシア経済の崩壊などが考えられる。

**■大島　稔（小樽商科大学言語センター）**
**「儀礼と信仰におけるアイヌとカムチャツカ先住民の関係」**

火と炉を中心とする儀礼・信仰ではカムチャツカ半島のコリヤーク、イテリメンとアイヌに多くの類似点が見いだせる。狩猟などによる移動中の仮の炉は、三脚構造の骨組みを作り、そこに炉鉤を吊す。この組み合わせは、チュクチ、コリヤーク、アイヌに共通する要素であり、炉と火の重要性に関わるものである。

また、アイヌやコリヤークの創造神話には火の神が登場し、双方とも儀礼、および日常的な願い事において火の神に食べ物を供物として捧げる。

火を使う儀礼や信仰においても共通要素が見いだせる。コリヤークやイテリメンにとって儀礼において重要な役割を担う火錐板や炉のそばに立っている神木には、目と口があったり、半人半魚であったりする木製の偶像が形どられている。アイヌの場合、これに対応するものとしては木製偶像（イノカ）と木幣（イナウ）がある。しかしアイヌの場合は、木幣が圧倒的多数であり、木製偶像は極少数である。

イナウは、ニブフの「ナウ」、ウイルタの「イッラウ」など、サハリン・アムール地域からの影響が大きい。しかし、「イナウ」と「イナウのキケ（削りかけ）」を分離して考えると、コリヤークにみられるような木偶に巻いた聖なる草「ハマニンニク」と「キケ」の機能的類似性が見てとれる。

アイヌと北方の諸民族の交流というと、サハリン・アムール地域との関連が強調されるきらいがあるが、より古くはカムチャツカ半島の古アジア伝統に行き着くのではないかと思われる。

**■渡部　裕（北海道立北方民族博物館）**
**「カムチャツカ先住民文化と日本文化との関係：北洋漁業における文化接触」**

19世紀末から1945年までおよそ50年間にわたって、カムチャツカ半島では日本人漁業者と現地先住民が接触していた。日本人漁業者によるカムチャツカ半島への進出は日露戦争終結に伴う権益によって本格化するが、カムチャツカ半島に初めて日本船が出漁したのは1897（明治30）年である。

以来、1945年まで季節的にではあるが、カムチャツカに日本人漁業者が居住し、1930年代前半以降に大陸からの移住者が増加するまでは、カムチャツカの人口は先住民と日本人によって多くが占められていた。

接触のあり方としては、日本人は先住民が漁獲したサケを購入したり、先住民に網の作り方や漁業技術を教えたり、先住民を日本の漁場で労働力としてあるいは冬季の番人として雇用したりしていた。また、漁場で働く日本人を対象とした医療行為を先住民に対して開放したりすることもあり、これは先住民が日本人に対して好ましい印象を残す大きな要因となっている。

そのほか先住民から日本人に渡ったものとしては毛皮類、パン、手製のナイフなどがあり、日本人からは米、菓子、銃、茶碗、背広などの物資から、kawasaki（船の名称）、sentoh（船頭）、1,2,3（数詞）など多くの日本語が取り入れられており、また「第一日本川（Pervaya　Yaponka）」、「第二日本川（Vtoraya Yaponka）」などの地名が今でも使われている。

**第２部「史料／資料からみた文化交流」**
**座長：佐々木史郎(国立民族学博物館)**
**■中村和之（函館工業高等専門学校）**
**「アイヌの沈黙交易」**

沈黙交易とは、取引をする双方が直接接触することなく行う交易のことである。交易方法の最も原初的なもので、世界各地に沈黙交易があったことが報告されている。

北方地域においても沈黙交易を確認することができる。ひとつは、『日本書紀』に記された斉明天皇六（660）年の阿部比羅夫と蝦夷の沈黙交易で、「待避交易」と考えられるものである。いまひとつは14世紀のサハリンにおいてアイヌと「野人（ツングース系の森林狩猟民）」の間で行われた沈黙交易で「不見不語交易」と呼ばれるものである。最後に18世紀のロシア商人と千島アイヌの交易のように片手に槍（やり）や刀を持ち、もう片手に品物をもって交易するという「武装交易」という沈黙交易の形態も存在した。

これらの交易により大陸文化がアイヌ文化へ大きな影響を与えた一方、アイヌが中国語に膃肭臍（オットセイ）という言葉が入るきっかけを作るなどアイヌも中国に影響を与えている。

15世紀以降は、北方における沈黙交易は衰退していく傾向にあると考えられる。

**■ユハ・A・ヤンフネン（ヘルシンキ大学）**
**「アイヌ民族文化の編年について」**

アイヌ民族文化を、人類学、民族学、考古学的情報を踏まえながら、言語学的に検討する。民族的、文化的な側面とは異なり、言語は時間の経過によって変化しない特徴を持つ。従って、アイヌを定義するにはアイヌ語の基層言語（周辺地域や民族間で連鎖的に使われており、系統関係を確認することができる言語）に基づいてなされなければならないと考える。

アイヌ語で表現される言語学的な系統は、北海道土着のものではなく、本州に由来する。アイヌ語集団は、縄文時代（1万年前～紀元前3世紀）からある言語集団の一つであり、弥生文化（紀元前3世紀～紀元後3世紀）の拡大により、本州にあったアイヌ語集団が北方へ移動・膨張し、その結果アイヌ語集団による擦文（さつもん）文化（およそ6世紀から13世紀）が北海道を中心に展開した。また、この擦文文化も、もとは朝鮮半島から日本へと移入してきた弥生文化の系統の中でとらえるべき文化であり、その意味でアイヌ文化は南方文化の系統の中で考えることができる。

しかし、一方で、アイヌ文化における海獣狩猟などの海洋適応の要素や、クマ送り儀礼など、アムール川流域に起源を持つ精神的な要素は明らかに北方文化の系統の中で考えることができる。アイヌはこの北方的文化要素を擦文文化の頃に、ほぼ同時代に存在したオホーツク文化（5世紀～12世紀）から取り入れた。

**第3部「物と技術の文化交流」**
**座長：小谷凱宣（南山大学）**
**■リディア・I・チュチュリーナ（ロシア・カムチャツカ州工芸教師）**
**「コリヤークにおける女性の仕事と文化交流」**

ロシア革命前、カムチャツカのイテリメンやコリヤークは海獣狩猟を行なっていた。海岸コリヤークは狩猟や漁撈によって越冬用の食料を確保し、女性はさまざまな植物性食料を採集し、イラクサやハマニンニクなど網やバスケットの素材を手に入れていた。女の子には5歳になるとさまざまな袋やバスケット作りや裁縫（さいほう）を習わせ、男の子には狩猟に連れて行って橇の作り方や日常具の作り方を学ばせた。トナカイ・コリヤークと海岸コリヤークはそれぞれの産物を交換していた。冬は祭りの季節で、海の恵みに感謝をささげた。長い冬の夜はさまざまな物作りを行ない、昔話や歴史が語られ、世代から世代へ技術や経験が伝えられた。

これまで、カムチャツカのさまざまな団体が先住民文化の保存復興に取り組んでおり、海外でも民族の伝統工芸の展示が行なわれ、また、現在、祖先の伝統を新世紀に伝えるべく「カムチャツカ工芸名人展」がペトロパブロフスク市内で開催されている。

チュチュリーナ氏はコリヤークの伝統的な衣類を会場に展示しており、実物をもとにそれらの製作技術について質疑も交えながら説明した。

**■津田　命子（北海道立ウタリ総合センター）**
**「アイヌ衣服の文様構成と製作、発達、展開を探る－特に伊達、虻田、有珠地方の資料をみる－」**

アイヌの物を作る行為には神々との関係が反映されている。衣服に悪い神を寄せ付けない文様が施されることもその現れである。古いアイヌの衣服のあり方を探る材料としてアイヌ風俗画をみると、文様はテープ状の布を置いて、その布幅の2分の1のところに刺繍（ししゅう）を施していることがわかる。さらに後世の画では置いた布の長さ2分の1の部分に曲線を加える技法が出てくる。伝えられる実物資料からもこの原則を確認することができ、また「手計り」をしていたことがわかる。握り鋏（和鋏）はアイヌ社会にもたらされず、アイヌは小刀を用いて布を裁（た）っていた。

和人との接触によってアイヌの衣服の素材も樹皮から木綿へと変化したが、文様の2分の1原則はまもられており、19世紀初頭からは文様に魔よけとしての「角」「刺（とげ）」「矢」の刺繍がしやすい木綿の普及とともに発達したのではないか。

**■谷本　一之**
**（北海道立アイヌ民族文化研究センター）**
**「トンコリ（アイヌ）とナルスユク（ハンティ）－北の五弦琴の形成－」**

アイヌの五弦琴「トンコリ」はサハリン・アイヌの楽器である。その起源については中国の史書に

中国東北部等を起源とする大陸渡来説もみられるが、実際にはその地域に五弦琴は存在しない。「トンコリ」の名称がニブフの一弦琴「トンクル」、ウイルタの弦楽器「テッケレ」と同様満州語からの借用語と考えられることもアイヌ独自の楽器であることを裏付けている。しかし、この楽器が歴史的に新しいものであることは口承伝承の分析からもあきらかである。「トンコリ」に近似する形式のものとして西シベリアのハンティの「ナルスユク」があるが、両者はその各部の名称が人体になぞらえられるなど共通する要素が多い。また、調弦のための糸巻の形式ならびに調弦法が三味線と基本的に同じである。こうしたことから、「トンコリ」の起源はハンティの五弦琴と三味線をもとに成立した可能性があり、さらにカムチャツカの弦楽器に同様のものがみられることから、アイヌとカムチャツカ先住民との関係および北方諸地域間の民族的関係を考える鍵のひとつであろう。

（学芸課　渡部　裕／角　達之助）

# 海獣狩猟と交易の世界

主催　国立民族学博物館／北海道立北方民族博物館

平成13年11月25日(日)13:00～17:00　当館講堂

当ゼミナールは国立民族学博物館の特別展「ラッコとガラス玉」(平成13年9月20日～平成14年1月15日開催)の関連事業として、巡回先の団体あるいは機関と国立民族学博物館(以下通称「民博(みんぱく)」)が共催する特別展関連巡回ゼミナールの第3回目で、当館を会場に開催されました。その概要を報告します。

民博の石毛直道館長および当館の岡田宏明館長の挨拶につづいて、基調講演・パネルディスカッションが行なわれました。

特別展「ラッコとガラス玉」実行委員長である民博の大塚和義教授の基調講演「北太平洋の先住民交易と海獣狩猟」では、ラッコとガラス玉に象徴される北太平洋の毛皮交易のあり方について、政治的経済的な側面あるいは先住民文化の変容から歴史的意味に触れ、さらに、オホーツク文化の交易者的役割、その後の東アジア経済圏を視野にいれた毛皮交易の地理的な拡がりや時代性に関する論点が展開された。そして、今回の特別展の成果でもあるさまざまな物質文化のあり方について、スライドを交えた各地域間の文化的相互関係や物流について見解を示した。

その後のパネルディスカッションは民博の博物館交流事業(巡回ゼミナール)委員長である秋道智彌教授の司会により、大塚教授のほか3名のパネリストの報告とコメント、ディスカッションが行なわれた。

＜報告１＞小樽商科大学・大島稔教授「ベーリング海におけるラッコ・オットセイ狩猟と交易の展開」では、ロシアのカムチャツカ進出を契機にはじまったアリューシャン列島・アラスカ海域、コマンドル諸島、千島列島におけるラッコ・オットセイ狩猟、毛皮交易と先住民への影響を時間軸のなかでとらえ、国家および商業資本に翻弄(ほんろう)されたアリューシャン列島先住民の歴史と文化について報告された。

＜報告２＞当館学芸課長・渡部裕「北太平洋の海獣類とカムチャツカにおける狩猟・交易」では、鰭脚(ききゃく)類、ラッコ、大・中型のクジラ類とその伝統的利用・交易とその後のラッコやオットセイの毛皮交易に触れ、さらにカムチャツカにおける海獣狩猟の特徴と近代・現代におけるカムチャツカ先住民の海獣狩猟のあり方を紹介した。

＜報告３＞民博・大塚和義教授「アイヌ：千島列島から北海道」では、中世アイヌの交易者的性格、北海道を中心にした交易体制、交易品の変遷などが報告された。

＜報告４＞民博・佐々木史郎助教授「山丹交易における海獣狩猟の役割」では、サハリン・アムール地域における毛皮交易と海獣狩猟の位置づけが報告された。この地域は中国との交易路にあって、クロテンなどの毛皮交易がさかんな地域であったものの、海獣類の狩猟は二義的な意味しかもたなかった。しかし、アザラシ類の脂肪や毛皮は地域間交易に供され、とくに脂肪は食生活を支えるものであった。

これらの報告につづいて先住民交易における海獣狩猟の補足コメント、海獣類をめぐる資源問題、核実験、資源開発にともなう環境汚染の問題などもとりあげられた。

会場は約50名の参加者でほぼ満席状態となり、盛況のうちにゼミナールを終了することができました。なお、当日は、当館ロビーにて民博で作成した特別展「ラッコとガラス玉」を紹介するパネル展を行い、同時に同特別展をビデオで紹介しました。

(学芸課　渡部　裕)

文化の日
特別事業

## 北に生きる
## ー民族の映像文化誌ー

講師　中田　篤（当館学芸員）

平成13年11月3日（土・祝）13:30〜15:00　当館講堂

文化の日を記念して、映像によって北方諸民族の文化を紹介する試みをおこないました。今回紹介した映像は、アイヌ無形文化伝承保存会によって企画・制作されたアイヌ文化伝承記録映画ビデオ大全集・シリーズ（6）「アイヌの四季と暮らし」第2巻「〜捕る・採る・獲る〜」です。同保存会では、アイヌの伝統文化やその伝承活動を対象として映画を制作しています。それをビデオ化したものが現在まで計30作品販売されていますが、今回はそのなかから「北に生きる」ための基本ともいえる生業文化を扱ったものを選びました。

本作品は、「捕る」「採る」「獲る」の三部構成になっています。それぞれに各地の伝承者が出演し、自身の体験談や実演を交えて伝統文化を紹介するとともに、萱野茂・二風谷アイヌ資料館館長の萱野茂さんが全体の解説をしています。

第一部「捕る」では、「ヒグマ猟に関する伝承」が取り上げられています。白糠の根本与三郎さんが山に入り、冬ごもり中のヒグマを狙った「穴グマ猟」、アマッポ（仕掛弓）を応用した「鉄砲アマッポ」の設置などを実演し、クマの送り儀礼などを紹介しています。

第二部「採る」では、「夏から秋にかけての山菜採集」がテーマになっています。浦河の遠山サキさんの山菜採りに同行するという形で、コケイランの地下茎やエゾノリュウキンカ（ヤチブキ）の根を採る方法、山菜採集にまつわる儀礼、帰宅後に調理する様子などが紹介されています。

第三部「獲る」の内容は、「マレㇰによる川のサケ漁」です。白老の野本亀雄さんがマレㇰ（マレㇷ゚：鉤銛（かぎもり））や夜間の漁にもちいる松明を製作する様子、また、それらの道具を使ったサケ漁の実演が紹介されます。

作品の上映時間は全部で60分ですが、各部の後に学芸員がそれぞれ補足的な短い解説をおこないました。聴講者は少なめでしたが、皆さん熱心にご覧いただいている様子でした。

（学芸課　中田　篤）

講　座

## 鉤銛にみる文化交流

講師　渡部　裕（当館学芸課長）

平成13年12月8日（土）14:00〜15:30　当館講堂

北海道アイヌのサケ漁具の一つにマレㇰとよばれる鉄製の鉤を利用した捕獲道具があります。このマレㇰ（便宜的に鉤銛（かぎもり）と呼びます）と大変よく似た形式の漁撈（ろう）具がサハリン、アムール川流域からカムチャツカ、千島列島に至る環オホーツク海沿岸にもみられます。本講座では、鉤銛形式の共通性と違いから、鉤銛技術の伝播や文化交流を考えてみました。

1．北海道アイヌの鉤銛

北海道アイヌ型鉤銛の第一の特徴は鉤の尖った先端を前方に向けて柄（え）に装着し、魚体を水面上から突くという利用方法である。鉄製鉤、鉤紐（ひも）、中柄、本柄の4つの部分から構成され、鉤には紐を通す孔（あな）が無いため、鉤紐は鉤の基部に細紐を巻いて取り付けられる。鉤紐は中柄の前端近くに作られた溝部分の孔を通して裏側で中柄に緩みが全く無い状態で結束され、鉤は溝にはめ込まれて固定される。そのため、魚体を突くと鉤は基部の先端を支点にして前方へ回転運動をする。本州以南にはこの形式の漁撈具は存在しない。

2．その他の鉤銛の形式

サハリンおよびアムール流域では、鉤を引いて使う方法、つまりマレㇰとは逆の装着方法もみられる。鉤に紐を結びつける紐孔が存在すること、鉤は溝に装着するか柄の先端近くに巻いた紐の輪、鉄製輪に鉤の基部を差し込む形式であり、魚体を突いた鉤は溝や輪から脱落する。この際の鉤の運動は直線運動に近い。サハリン・アイヌは中柄をもつが、鉤の形はサハリン・アムール型である。一方、カムチャツカには南部のイテリメンに回転型の鉤銛があり、また、コリヤークやエベンにはサハリン・アムール型の鉤銛がみられる。千島アイヌでは鉤の形式が北海道アイヌと同じであるので、同様の使用が考えられる。

3．結論

カムチャツカに紐孔をもつ回転型があり、サハリン・アイヌの鉤銛は北海道アイヌとサハリン・アムール形式の折衷型であることから、北海道アイヌの鉤銛形式の起源は古く、カムチャツカやサハリンに伝えられ、サハリン・アムール形式の鉤装着方法の変更（引いて使うタイプから突くタイプへ）に影響を与えた可能性がある。

（学芸課　渡部　裕）

## 今号の表紙 ― 魚叩(たた)き棒 ―

釣りや網、梁(やな)などで魚を次々に捕獲するときは、捕らえた魚の息の根を素早くとめる必要がある。しかし、北方の人びとには自然の恵みに感謝し、捕った魚を粗末にしない信仰があった。魚がまた自分たちのもとへ戻ってくることを祈願し、一匹ずつ頭を叩いて殺したのだ。今号の表紙はアイヌの伝統的な漁撈(ろう)具で、かつ彼らの自然に対する信仰を表す道具、「魚叩き棒」である。

日本の本州などでも使われるこの道具は、北米の北西海岸インディアンの間でも利用されており、彼らの魚叩き棒には海や水の世界を支配する動物や神の彫刻が施されていることが多い。

ところで、最近の北海道内での発掘成果により、この魚叩き棒は、7世紀から12・13世紀にかけて、東北地方北部や北海道全域に展開していた擦文文化の時代には既に存在していたことがわかっている。魚叩き棒が確認された遺跡は千歳市のユカンボシC15遺跡と千歳市美沢川流域の遺跡群である。これらの遺跡から出土した魚叩き棒には無紋のものもあるが、取っ手の部分に刻み模様を入れて装飾しているものもある。擦文土器の模様と何か関係があるのであろうか？

## みんぞく　こうこ　はくぶつかん in　北海道

このコーナーでは、当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

10/10(水)　旭川市立北門中学校郷土部の生徒たちが、アイヌ民族の丸木船を復元/D

10/12(金)　50年ぶりの試掘調査の結果、モヨロ貝塚よりオホーツク式土器、骨角器などが出土、網走市/AS

10/20(土)　垣ノ島A遺跡で縄文後期末(約3200年前)のものと見られる漆塗りの注口土器が完全な形で出土、南茅部町/AS

10/20(土)　阿寒アイヌ工芸共同組合が、アイヌ語や民族の歴史、風習をマンガを使って紹介した冊子「アイヌ語豆辞典」を作成/D　(夕)

10/25(木)　旭川市立近文第二小学校の6年生が、総合学習の時間を利用して、5ヶ月かけて竪穴住居を製作/D

11/7(水)　旭川竜谷高校郷土部がアイヌ民族の子守歌の研究で「第36回全道郷土研究発表大会」考古・民族部門で最優秀賞を受賞/D

11/13(火)　有珠山周辺の6市町村が、「火山の歴史にふれる自然博物館」建設構想を発表、虻田町/Y

12/11(火)　アイヌ民族15世紀の墓、泊村で相次ぎ発掘。青磁碗、内耳鉄鍋が完全な形で出土、/D

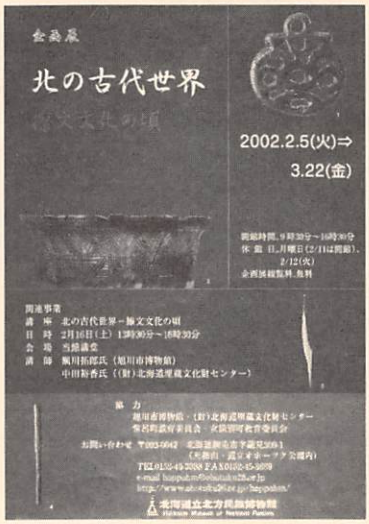
※AS：朝日新聞、D：北海道新聞、Y：読売新聞、複数紙掲載の場合は扱いが大きい方を紹介しています。

企画展

## 北の古代世界
## 擦文文化の頃

7世紀から12・13世紀にかけて、北海道を中心に展開した擦文文化は、続縄文文化の伝統を引き継ぎ、本州やオホーツク文化の影響を受けながら、後にアイヌ文化の源流へとつながてゆくといわれる文化です。彼ら擦文人の営みを紹介します。

開催期間　2002.2.5(火)～3.22(金)
休館日　月曜日(2/11は開館)、2/12(火)
観覧料　無　料



# News

## ■寄贈資料（10～12月）

○網走市の大崎優氏から、ウイルタの木製人形像4点、ウイルタ文様の切り絵12点、『オロッコ・ギリヤーク民俗資料調査報告書』が寄贈されました。

○ロシア連邦カムチャツカ州のリディア・チュチュリーナ氏から、コリヤークの皮なめし具2点が寄贈されました。

○千葉県の森田眞旭氏から、コリヤークの小物入れ付首飾り7点、財布1点が寄贈されました。

○神奈川県の西村幹也氏から、ツァータンのお茶袋、小道具入れ袋、ミルク保存用袋、トナカイ放牧用鞭、ミルク捧げ具、仔トナカイ係留具各1点が寄贈されました。

## ■主な来館者（10～12月）

10/5（金）
全国都道府県政令指定都市北方対策主管課長会議一行　47名
内閣府北方対策本部事務官
本田啓一郎氏ほか

11/8（木）
糸満市教育長　　金城　政安氏
同社会教育係長　野原　　哲氏
ほか１名

11/10（土）
北見工業大学
副学長　常本　秀幸氏
ほか中国ハルピン工程大学
研究者5名

## ■行事案内（2～3月）

2/5（火）～ 3/22（金）
企画展「北の古代世界
ー擦文文化の頃ー」

2/9（土）
講座「映像で見る北方の子育てと遊び」

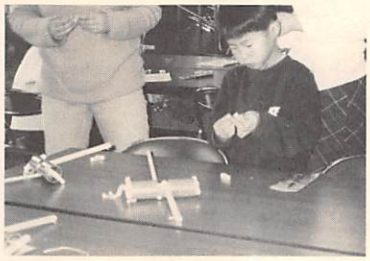
2/16（土）
講座「北の古代世界
ー擦文文化の頃ー」

2/23（土）
講座「擦文文化とオホーツク文化」

## ■その他の行事報告（10～1月）

10/13（土）
博物館クラブ
「北方民族のくらしと植物
～秋の観察会～」

11/10（土）
博物館クラブ
「北方民族のワナ」



12/27（木）
ロビーコンサート
「弦楽四重奏による青少年のための 室内楽の夕べ」

1/12（土）
博物館クラブ
「かんじきで歩こう」

## ■観覧者動向（10～12月）

| | 常設展示 |
|---|---|
| 10月 | 2,702 |
| 11月 | 804 |
| 12月 | 453 |
| 計 | 3,959名 |

## ■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をとおして北の文化を紹介しています。年会費は3000円です。すでに会員になられた方は、お知り合いの方にもご紹介下さい。詳しくはお問い合わせ下さい。



北方民族博物館だより
―第　44　号―
2002年1月18日発行

編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042　北海道網走市字潮見309-1
TEL 0152-45-3888　FAX 0152-45-3889
e-mail:hoppohm@ohotuku26.or.jp
ホームページ：http://www.ohotuku26.or.jp/hoppohm/